

# 日本的宗教観と宗教教育

— 宗教科教育法の授業実践に向けて —

The Japanese Religious Outlook and Religious Education:  
Toward Constructing a Better Religious Teaching Curriculum

野 口 真

Makoto NOGUCHI

## 要 旨

宗教科教育法の授業実践に向けて、日本的宗教観と宗教教育との関係をまとめた。このテーマは、「宗教的情操」の歴史的経緯と現状に示された問題性を踏まえ、それをさらに大きな視野で捉え、自分自身を含めた現在の課題として受け止めていくために設定された。ここではまず、「日本的」という捉え方について、個人の内面理解の枠組みという側面と、自国民論としての展開という側面から、その現状を探った。次に、「日本的宗教観」について、宗教的曖昧さと宗教意識の希薄さの問題を中心に分析した。その結果、「日本的」という捉えは、個人や国民理解のステレオタイプ化を進め、「日本的宗教観」の特徴である宗教的曖昧さは、個々の宗教意識の確立を妨げることが懸念された。

## 1. このテーマの位置づけ

### (1) 講義全体の中での位置づけ

「宗教科教育法」前期分の講義内容を4章に分け、それぞれの主題を第1章「宗教科教育の位置づけ」、第2章「日本の教育史と宗教的情操」、第3章「宗教的情操に代わるもの」、第4章「授業づくりと模擬授業」とする。ここで取り上げる「日本的宗教観と宗教教育」というテーマは、第3章「宗教的情操に代わるもの」に含まれる。前章で学んだ「日本の教育史と宗教的情操」の内容、特に「宗教的情操」という用語の問題性を踏まえて、この語に内包されてきたも

のを更に明らかにし、それを新たな形に転換するための道筋をつけることがこの章の主眼である。「日本的宗教観と宗教教育」については、4回の講義の内の前半2回分を使って扱う予定である。

前期分の授業計画全体の中での、「日本的宗教観と宗教教育」の位置を下表で示す。表の内、※印をつけた部分がそれに当たる。

表1 授業計画（前期分）における「日本的宗教観と宗教教育」の位置

	回	授 業 計 画	内 容
第1章	1	オリエンテーション	ガイダンス、クラスの進め方
	2	宗教を考える教育（1）	宗教教育のとらえ方
	3	宗教を考える教育（2）	宗教科について
第2章	4	日本における宗教と教育（1）	日本の近代化と宗教教育
	5	日本における宗教と教育（2）	国家主義の台頭と宗教教育
	6	道徳教育と宗教科教育（1）	戦後教育と道徳、宗教科
	7	道徳教育と宗教科教育（2）	道徳、宗教科の現在
第3章	8	日本的宗教観と宗教教育（1）※	「日本的」というとらえ方
	9	日本的宗教観と宗教教育（2）※	宗教的曖昧さと「宗教的情操」
	10	スピリチュアリティと宗教教育（1）	魂の問題としての宗教教育
	11	スピリチュアリティと宗教教育（2）	スピリチュアルブームと宗教教育
第4章	12	授業づくり－人間（1）	模擬授業と批評－①
	13	授業づくり－人間（2）	模擬授業と批評－②
	14	授業づくり－人間（3）	模擬授業と批評－③
	15	前半のまとめ	これまでのふりかえり、レポート

## (2) 「宗教的情操」との関連

前期の講義全体を通して取り組もうとしているのは、「宗教的情操」の問題である。宗教科教育法の実践的な課題を学ぶ上でも、模擬授業を準備していく上でも、外せない問題がこの「宗教的情操」であり、いわば宗教科教育についての思考と実践の足掛かりとなるものである。大きな視点からは、「宗教的情操」の問題は、宗教と教育との関係をどう捉えるか、何を仲立ちとしてその繋がりを考えていくのかという問いに連なるものである<sup>1)</sup>。

「日本的宗教観と宗教教育」を扱う今回は、「宗教的情操」の意味内容やその用法に表れている「曖昧さ」という点をさらに掘り下げ、日本の社会文化的な問題と照らし合わせながら検討することになる。「日本的」という大きな枠から考えることには、様々な困難やある種の危険性も付きまとう。それは、問題を国民性や民族性という単位で括り上げてしまい、単純化させることになりかねない。あるいは、その社会文化の文脈に自分自身も含まれているが故に、客観

的な視点が定まらないまま情緒的な論調に流される心配もあるだろう。

しかし、そのような不安定な作業ではあっても、試みる意味はあり、またその必要もあると思われる。なぜなら、すでに様々な形で「日本論」「日本人論」が展開されており、その俗説的な見解は私たち自身のものの方にも、知らず知らずのうちに影響を与えているからである。そのような状況を捉え返すためにも、「日本的」という枠から「宗教的情操」の問題点をもう一度見つけ、考えていく必要があると考える。この作業をくぐり抜ける中から、「宗教的情操」が内包する問題点を回避しつつ、必要な意味内容をすくい上げる手だてが見えてくるはずだからである。

## 2. 「日本的」というとらえ方

### (1) 自分の鏡としての「日本的」

先ず「日本的」と言われている内容について、自分自身の内を眺めてみることからこの作業に取り掛かることにする。それは、いわゆる日本人論としてあたかも客観的に語られている事柄を、捉えなおしていく上で必要なことだと考える。「日本的だ」と感じていることが、本当に自分自身の実感としてあるのか、それとも何となくそう言われているからそう思っているだけなのか、できればその辺りの感覚まで探っていきたい。

自分自身の姿を映すものとして、「日本的」という鏡を私たちはそれぞれ手にしている。いつの間にか、気がつけばそれを手にしていたということだろう。改めて、その鏡は正しく自分の姿を映しているのか、そしてその姿を「日本的」と呼ぶことは正しいのかを問わなければならない。いわゆるアイデンティティの問題として、自分が「日本人」であるということが、どのような形で、どのような位置を占めているのか確認しなければならないだろう。

そのためには、自分自身の内で働く感情や、思考、あるいは記憶や思い出なども掘り出す必要があるだろう。まるで、自分自身を腑分けするような作業になるかもしれない。しかし、それをやってからでないと、先に進むことは難しい。自分を棚に上げた中で、理論だけを学習することでは、この問題に対して本当に向き合うことにはならないからである。

### (2) 情緒の問題として

「日本的」と捉える際に、よく問題となるのは「情緒」に関する事柄である。風景にしても、伝統的な行事や風俗にしても、日本的であると捉えた際には「情緒がある」「情緒豊か」と評されることが多い。この「情緒」とは何か。「宗教的情操」との関係を考える上でも、それぞれ感情に関わる内容として注目しておく必要があるだろう。「情緒」と「情操」の意味を辞典で引く

と、それぞれ次のようになる<sup>2)</sup>。

情緒：①人にある感慨をもよおさせる、その物独特の味わい。また、物事に触れて起こるさまざまな感慨。「—のある風景」「江戸—」「—豊かに描写する」②『心理「情動」に同じ。「—不安定」〔もともと①の意。「哲学字彙」(1881年)に英語 emotion の訳語として載り、心理学用語として定着〕

情操：最も複雑で、高次の感情。感情の中で、最も安定した形をとり、知的作用・価値を伴う。美的・道徳的・知的・宗教的の四つに分けられる。〔西周にしあまね訳「癸般氏心理学 - 下」(1879年)に英語 sentiment や feeling、ドイツ語 Gefühl の訳語としてある〕

問題として捉えておくべき違いは、情緒の方が「情動」の意で用いられることがあるように、原始的、直接的な感情の動きであるのに対して、情操は安定した形をとる高次の感情であるとされている点である。この点における混合が、「宗教的情操」の用法にはあるのではないかと思われるが、その点については別に検討したい。

ともかく「物事に触れて起こる感慨」として「日本的」と思えるものは何か、自分の内に問うてみる。おそらく共通するものとして、自然の情景に関するものがあるのではないだろうか。「四季折々の……」「心のふるさと……」「里山の風景は……」などというフレーズが呼び起こす感慨、一定のイメージが思い浮かべられそうだとしたことの中に、「日本的」と括られる情緒の問題があるのではないだろうか。更にこれと併せて、より宗教性に近い「清々しい」「心洗われる」「凜とした」といった感慨があるだろう。神道との関連が元にはありそうだが、ともかくこれも「日本的」情緒として共通に意識されるものであるだろう。

ここでは「日本的」な情緒の具体例として、桜が呼び覚ます感慨について考えてみる。それぞれ桜に対してどのようなイメージを持っているだろうか。春の訪れと共に浮き立つ気持ちや、卒業、旅立ちの姿などが、桜の花には重ねられている。いつの間にか「桜ソング」なるジャンルがJポップのシーンに生まれ、毎年その季節には新たな桜ソングが街に流れている。日本の国花だと考えているかもしれないが、国花としての法定はないそうである。しかし、なぜか日本の国花は桜と菊であるというのが一般的な理解となっている。また、その「散り際の良さ」が武士道の精神と重ねられ、日本人の精神性や死生観すら示すもののように扱われる。私たちも、何か桜には透明感のある静謐な死のイメージが纏わりついているように感じてはいないだろうか。

このようにみていくと、桜にまつわる感情は、いかにも日本人の中に昔々から浸み込んだ感慨であり、情緒であるように思われるが、実は現在のような桜並木や花見の風習が定着したのはそれ程古いことではないという。以下に朝日新聞の記事から紹介する。

いちどきに群れ咲き誇り、なんの未練もなさそうに花吹雪となって散ってゆくからこそ、桜にナショナリズムをまとわせる言説が成り立つ。だが、そんな桜のイメージは、江戸時代の終わりごろ、新しい園芸品種としてソメイヨシノが作り出されてから流布したものだった。

歴史のなかで、桜が、どう語られてきたかを論じた『桜が創った「日本」』（岩波新書）の著者で社会学者の佐藤俊樹・東大教授（53）は、「ソメイヨシノは革命の花だ」と説く。「ソメイヨシノの出現を境にして、桜とは何か、桜を見るときは何かの感覚が大きく転換したように思える」

ソメイヨシノは、登場してから百数十年しかたっていないものの、<sup>けんらん</sup>絢爛たる咲きっぷりと成長の速さを買われ、いまや日本の桜の約8割を占めるといわれる。最初の1本の原木から接ぎ木挿し木で増やされた、すべて同じ遺伝子を持つクローンだ。

佐藤さんによると、江戸時代までの花見のスタイルは、寺社の境内などにある一本桜を、その由緒とともに<sup>め</sup>愛でるのが主流だった。群桜だと多品種をとりまぜて、ひと月近く、順々に花が開くようにされていた。

ソメイヨシノがあたり一面、満開になるような光景は見られなかったのだ。「ソメイヨシノは、見る者を包みこみ、遠近感を失わせ、魂を奪いとる。その狂おしいほどのイメージは、いにしえから人が思い描いてきた幻想の桜を実体化してしまったともいえます」と佐藤さんは語る<sup>3)</sup>。

この記事は、私たちの内にある桜のイメージの発生源がせいぜい江戸末期であったということ伝える。この桜の例のように、「日本的」と思っているものの来歴を、私たちは知らないままなのではないか。知らないままに、まるで我々の感性や体質というような無意識の底に、長い歴史と伝統を通して浸み込んでいると思込んでいるのではないだろうか。そう思わせるだけのインパクトがこの記事にはある。ともかく、「日本的情緒」という捉え方の成り立ちについて、それぞれに問い直していく必要があるだろう。

### (3) 文化の問題として

いうまでもなく、我々は日本の文化的環境の中で過ごしている。これまでもその中で育ってきた。空気のようにそれらは周りにあり、否応なく我々はそれを吸ってきた。意識せずにそれを呼吸してきたわけで、その分影響は大きいと言える。日本語を使用し、日本語で思考している段階で、日本文化の枠内に縛られているのだともいえる。

文化の問題として「日本的」であることを捉えるための素材を、以下に挙げてみる。

- 文学（短歌、俳句、川柳など）

- ・芸術（絵画、工芸など）
- ・芸能（舞踊、謡、能、歌舞伎、民謡、落語、演歌など）
- ・道（剣道、柔道、合気道、茶道、華道、書道など）
- ・祭り（縁日、節句など）
- ・日常性（行事、習慣、食、サブカルチャーなど）

雑多に並べた状態でしかないが、これらのものが相互に繋がり絡み合い、「日本的」な文化状況を作り出している。よく「海外で過ごしてみて初めて日本人であることを意識した」と言われるが、この空気のような文化が存在することに、それが無いところに来て初めて気づいたということなのだろう。

日常性として挙げた行事、習慣などの事柄は、「情緒の問題」として先に述べた内容と重なるところが多いが、より改まって文化的といえる芸能や芸術に属する事柄からは、例えば「粹」であるとか「わび・さび」であるとかいう、日本の美意識や価値観の問題が生まれてくる。ここからは、非常に微妙な感覚の話に入り込んでいこう。果たして共通なものとして、それは存在しているのかと、手探りをするようにして確かめ合わなければならない。例えば、具体的な何かを共に体験し合ってみて、それをどう感じるのか確かめ合う必要があるだろう。

おそらく「粹」や「わび・さび」を感じるというのは、年代による差異が多いことだろう。伝統文化や伝統工芸との距離は、やはり若い世代ほど遠いと言える。むしろそれらに対しては古臭い、ダサいという感覚が強く、このような伝統からの遊離を上世代は憂えている。しかし、その一方でナショナリズムの周辺では、相変わらず伝統文化や美意識、価値観が強調されている。「ジャパニズム」と呼ばれるような新たに装いで、それらはまた現われてきている。

日本という文化的風土の中で育ち、日本語を用いて暮らしている私たちが、その文化の持つ美意識や価値観から無縁でいられるわけではない。問題は、そのことを冷静に受け止められない「構え」にあるのではないか。一方にはそれらを無いことにして、全否定するような構えがあり、もう一方にはそれらを祀り上げ、前肯定するような構えがある。両極に分かれたこのような構えは、やはり力が入り過ぎ冷静な態度であるとは言えないだろう。普通に文化の息を吸っているように、自然な眺め方を取り戻し、それを相互の中で確認し共有することができればと考える。

具体的な事例としてここで取り上げるものとしては、能や歌舞伎の映像などが考えられる。一緒にそれを鑑賞した上で感想を交流するという形が取れるかもしれない。あるいは短歌や俳句を元にして、それによって呼び起こされる感覚を出し合うという活動ができるかもしれない。ともかくそのような活動を通して、自分の内にも日本文化に影響された何らかの美意識や価値観が内在することを、まずは冷静に眺めてみたい。そして、個々に生じる感情には、それぞれ

の生育環境や生活背景によっても大きな差があるのだということを、相互に確認できればと考える。

#### (4) 宗教の問題として

ここまで自分の内側を辿りながら、情緒の問題、文化の問題を通して「日本的」ということを探ってきた。さらにここでは、宗教に関わる問題として「日本的」なものについて考えていく。

宗教に関わる問題といっても、それらはむしろ日常や文化の中に紛れていることが多い。先に情緒の中で述べた「清々しさ」なども、それに当たると言える。古い神社の境内に足を踏み入れた際に、何か自分の内に湧いてくる感慨があるとすれば、先ずはそれがあるということそのまま受け止めておきたい。例えばそれが「清々しい」と呼ばれるような心地よい感覚であれ、「怖ろしい」というのに近いネガティブなものであれ、経験を通してすでに何かが各自の中に埋め込まれているということだろう。キリスト教徒であれ、仏教徒であれ、その人にとっての自覚的な信仰とそのような感慨とは、およそ無関係なのではないだろうか。湧いてくるに任せおけば、自らの経験の内にある記憶から、何らかの感慨が現れてくるのがむしろ自然だろう。

ただし、そのようにして起こる感慨をことさらに「日本人の血」とか「民族の印」などと呼ぶかどうかは別問題である。文化というものは、特に宗教的な情緒は、本当に空気のように漂い浸透するものである。私たちは、生まれ落ちた地の空気を吸う以外に呼吸することはできないのだから、ごく普通にそこに含まれた宗教的情緒が体に染み込んだというだけのことである。問題はその先にある。

現代はそのような日本的宗教の空気は薄らぎ、すでに年少者は脱却していると思われるかもしれない。しかし例えば多くのアニメ作品の中などに、それらは重要なモチーフとして描かれている。スタジオジブリの作品は、多くの子どもたちに喜ばれ、受け入れられており、また芸術的にも価値を認められているものが多いが、その作品のあちこちに日本的な宗教の表象が散りばめられている<sup>4)</sup>。

思いつくままに書き出すなら、「となりのトトロ」のトトロ、まっくろくろすけ、「もののけ姫」のこだま、シシ神、「千と千尋の神隠し」の腐れ神、カオナシなどである。「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」などは、全編を日本的宗教の世界観が貫いているともいえる。それを現代のアニメ作品として造形したことが、これらの作品がヒットし受け入れられている原因ではないかとも思える。

これらの作品の世界観を共有できる私たちは、そして子どもたちは、やはり日本的宗教世界の空気の中に今も生き続けていると言わなければならないだろう。そのような感覚が一体どこに向かっているのか、後に検討していくことになるが、運勢や占いのようなスピリチュアチュ

アル・ブームとも繋がり、問題を生み続けているのかもしれない。

授業の具体例としては、このようなアニメの場面を取り上げて、日本的宗教観というものがポップな形で現れたところに佇みながら、それらのキャラクター化されたものの元の姿をできる限り言語化する取り組みが考えられる。例えば「こだま」が表象するものを挙げるなら、山の神、森の精、木の霊、生の気配、雨露の姿などということになるだろうか。おそらくここからは、自然の内に人を超えた力を見るアニミズムのような原始的な宗教性が浮かび上がってくると思う。いのちを生み育む、力強さや奥深さの感覚が共有されるかもしれない。

そこから「一木一草に神宿る」とか「八百万の神々」というように、神道の信仰に彩られた方向に一気に進むかどうかが見きわめどころとなるだろう。日本的宗教観は、ここが連続的であり一直線なのである。全ての宗教的感覚を「日本的」という枠に取り込んでしまうことになる。それを避けるには、もっと前でブレーキを踏むしかないが、それが「文化の問題として」の中で述べた「全否定の構え」にもなってしまう。しかし仮に意識的に否定したとしても、「もののけ姫」の世界が感覚として分かってしまうのであれば、それは分裂した態度にしかならないだろう。

必要なのは、自分の内に自然に生じる感覚を受け止めつつ、冷静に対処する態度だろう。その感覚を受け入れつつ、視野を狭くしない態度が求められる。おそらくここで取り上げたアニミズムと呼ばれる原始的な宗教感覚は、人類の遠い記憶のようなものであるだろう。これは国民性や民族の問題というより、まずは文化人類学の対象となるような普遍性を持つ問題である。我々の内に潜むのは、このようにおよそ人類に普遍的なものであり、その日本バージョンなのだという認識が必要なのではないだろうか。それにより、冷静に対処していく道が探しやすくなると思われる。

### 3. 日本人論の問題性

#### (1) タイプ論と特性論

ここまで、自分の内にある情緒、感情の問題として「日本的」ということを捉えようと試みた。情緒にしても感情にしても、具体的に捉え難く、特定し難いものであるため、そもそも曖昧さを持つ事柄である。それに依拠して「日本的」ということが語られる限り、曖昧さが付きまとうのは避け難い。ここでは、「日本的」ということに対する考察をより深めるために日本論、あるいは日本人論を取り上げていく。漠然とした感覚的なとらえ方から、理論的な捉え方に対象を移しつつ、その成り立ちや構造について検討していきたい。

その前に方法論の参考として、心理学におけるパーソナリティ理解の2つの方法について述



べる。ひとつはタイプ論（類型論）、もうひとつは特性論である。タイプ論とはA、B、C、D、Eのように典型的な性格の類型を決め、すべての人をそのどれかに当てはめるという方法である。有名なものとしてはクレッチマーの体形気質理論（分裂気質、循環気質、粘着気質の3類型）や、ユングのタイプ論（外向・内向と思考・感情・感覚・直観の組み合わせによる8類型）などがある。これに対して特性論は、パーソナリティを複数の構成要素（特性）からなるものとして捉え、その特性の組み合わせと分量で記述しようとする方法である<sup>5)</sup>。

この2つの方法は、パーソナリティについてだけでなく、他の複雑で曖昧なものに対しても、それを捉えやすくする方略として考えることができる。その際に、タイプ論の方は、典型的な類型に分けるという方法であるため、なるほどと納得を得やすい。しかしその一方で、微妙な差異は捨象してしまい、いわゆるステレオタイプの見方に陥りやすい。特性論の方は、客観的に測定可能な形で記述することが可能ではあるが、全体像として結局どういうことなのかは捉えにくいものとなる。

この2つの方法について頭に置きながら、いくつかの日本人論について、その記述内容をみていきたいと思う。

## (2) 「日本人論」の中から

日本人論と呼ばれるものは、これまでに相当の数が存在してきた。その大半が日本人自らの手になるものであり、いわゆる自国民論という形態である。代表的な日本人論としては、次のようなものが挙げられる。

「菊と刀」 <sup>6)</sup>	ルース・ベネディクト
「日本人とユダヤ人」 <sup>7)</sup>	イザヤ・ベンダサン（山本七平）
「「甘え」の構造」 <sup>8)</sup>	土居健郎
「日本辺境論」 <sup>9)</sup>	内田樹

それぞれの日本人論について検討する余裕はないので、このうち内田樹の「日本辺境論」を元に、日本の特殊性をどのように捉えているかを検討する。内田は日本の地形的な位置関係を元に、常に世界（中華）に対する辺境としての自認が日本人の意識を支配してきたと見る。内田による世界と日本を対比させた関係は、次のようになる。

〈世界〉		〈日本〉
中央	—————	辺境
真	—————	仮
ソト	—————	ウチ
罪	—————	恥

個人 ————— 集団  
 論理 ————— 情緒

辺境としての自覚の元に、自らのウチで起こることは仮のものでしかなく、常に真理はソトにあるという認識が生まれる。ウチを固めるためには個よりも集団を重んじるしかなく、そこでは論理ではなく情緒の方が重視され、繋がりが強化される。そしてこの情緒の重視が、「甘え」の構造や、「空気」を読む関係や、「いじめ」問題などへと繋がってくるわけである。これは、日本人の精神性として挙げられる「曖昧さ」がどこから生まれてきたかを説明するものだともいえる。

そもそも自国民論が盛んであること自体が、日本人の何らかの特性を示しているようにも感じられるが、内田の論からは、辺境に存在する仮のものしか持たない民族が、何とかして自らの姿を映し出す鏡を探し出そうとあがいているということになるだろう。「日本文化というのはどこかに原点や祖型があるわけではなく、「日本文化とは何か」というエンドレスの問いのかたちでしか存在しません<sup>10)</sup>と彼は記す。もしそうだとするならば、繰り返される日本人論には、かえって日本人はこうだと言い切り、クリアな像を映し出す鏡としての役割が求められることになるだろう。タイプ論と特性論で言えば、ひとつのカテゴリーに当てはめて示すタイプ論による説明が待望されることになる。

これによって、クリアな姿で日本人の特性が示されることになるわけだが、タイプ論の弱点であるステレオタイプ化は避け難い。クリアな姿を示すために、カットされた特性が実は多くあるということが覆い隠されてしまうのである。

### (3) 辺境的宗教性の問題

内田は日本人の特性を、その地理的文化的辺境性から説明しているが、それは日本人の宗教性についての説明にも及んでいる。その部分を記す。

辺境人の宗教性は独特のしかたで構造化されています。辺境人はこんなふうに考えます。私たちの外部、遠方のどこかに卓越した霊的センターがある。そこから「光」が同心円的に広がり、この夷蛮の地にまで波及してきている。けれども、その光はまだ十分には私たちを照らしてくれてはいない<sup>11)</sup>。

いろいろな事柄が思い起こされる記述である。遠く唐、天竺に、あるいはエルサレムに表れた「光」が、長い距離と時間を超えてこのアジアの端の日本まで伝えられてきたという感覚。このような宗教的辺境性をもたらす影響を、内田は次の2面から描いている。まず、そのプラスの面についての記述は次の通りである。

自らを霊的辺境であるとする態度から導かれる最良の美質は宗教的寛容です。異教徒を

許容するという宗教的寛容をヨーロッパ世界は無数の屍骸を積み上げた後にしか達成できませんでしたが、日本では宗教間の対立で殺し合いを演じたという事例はほとんど存在しません。私たちの社会では、さまざまな宗教が緩やかに共生しています<sup>12)</sup>。

一方のマイナスの面は、次のようになる。

その反面、辺境的宗教性には固有の難点もあります。それは辺境人がおのれの霊的な未成熟を中心からの空間的隔絶として説明できてしまうせいで、未熟さのうちに安住してしまう傾向です<sup>13)</sup>。

さてしかし、ここで描かれている辺境的宗教性の両面は、実際には一体化しているようにも思える。つまり、その美点として描かれた「宗教的寛容」も「未熟さへの安住」と裏表の状態にあるのではないかと思われるのである。内田は「宗教の穏やかな共生」を日本の美質だと述べているが、本当にそうなのか。その点について考えを深めながら、さらに日本的宗教観について探っていきたい。

## 4. 日本的宗教観と宗教的曖昧さ

### (1) 日常への宗教行為の浸透

ここまで内田の日本人論を元にして、日本人の特性と言われる「曖昧さ」の元に辺境の意識があるという主張をみてきた。ここではこの捉え方を、特に「宗教的曖昧さ」の問題に引きつけながら考えを進めていく。「宗教的曖昧さ」とは、日本人の様々な宗教的態度を指して使われる言葉であるが、特に「宗派・宗教へのこだわりのなさ」と、「日常と地続きの感覚」について取り上げる。

まず「宗派・宗教へのこだわりのなさ」であるが、それは例えばお盆はお寺、初詣は神社、さらにクリスマスも祝うというような振る舞いを指す。更にはライフイベントとしても、お七やで神社に詣で、結婚式は教会で挙げ、葬式は寺院で行うという事に矛盾を感じないという姿である。それぞれの宗教に対してこだわりのないとも言えるが、むしろ節操がないとも言える。

それぞれの行為についてみると、それを行う個人の中には宗教的な意識は明確ではない場合がほとんどだろう。それらは神道、キリスト教、仏教の教義を信じての行為ではなく、その時その場が何らかの形で天界や異界と繋がっていると感ずるためのものでしかないのではないか。いのちを授かったときは「命の源」と、結婚を誓う際は「愛の世界」と、死者を前にしては「彼岸」と繋がるように。その時その場にふさわしく、単に宗教的な形態を使い分けしているようにも見える。まるで「手段」としての宗教である。これは内田の言う辺境的宗教性から生じた事態かもしれないが、もはや「未熟さへの安住」は「宗教の手段化」に至っているとはいえない

だろうか。

「日常と地続きの感覚」というのは、この手段化した宗教行為がもたらす感覚だといえる。もはや宗教は、それぞれの教義が元にあって、それを信じるかどうか問われるものではなく、日常を過ごすうちに必要とされた場面で、それを通過するためのものである。その場面とは、いずれも何らかの非日常性を帯びた場面であるわけだが、その日常に現れる非日常的な小さな瘤を越えていく手段、方法として、宗教的な形態を利用しているとみることができるだろう。先に例で挙げた誕生や結婚、死といった大きなライフイベントでは、さすがに宗教的形態がまだ明確ではあるが、より日常化したイベントの中ではその宗教性はすでに不明確な姿となっている。

学校行事に引きつけて事例を挙げるなら、例えば食事の前の「合掌」や始業前の「黙想」などが思い浮かぶ。それぞれ号令の言葉は様々だろうが、「合掌」にしる「黙想」にしる、元々は宗教的な行為を指す言葉だった。それらが公立学校を含め全国の学校で何の疑いもなく行われているという事実は、改めて考えると不思議なことである。しかし食すること、他の生き物の命をいただくという行為は、やはり今でも日常の中の非日常性の小さな瘤として意識されるのだろう。始業時にしても、生徒の意識集中という意図と共に、時間の区切りとしてはちょっとした非日常感が求められるわけだろう。

このように注意深く見れば、様々な形で日常の中に宗教行事の影は浸み込んでいる。よく議論されるように、それが慣習であるのか宗教行事であるのかという判断は、この浸み込みの具合が深い分だけ難しい状況を生んでいる。このような事態を生んでいるのは、宗教を手段として捉える日本の宗教観であり、宗教的曖昧性だといえるだろう。

## (2) 個人の宗教意識

日本では、個の確立よりもウチなる集団の秩序を保つことの方が重視される傾向が指摘されている。さすがに旧来からのイエ制度やムラ組織などは解体されつつあるが、ではそれによって解放されたはずの個は確立されてきたのか。学校でのいじめの状況などをみると、むしろ集団への同調圧力は増しているように思える。しかも、その集団にはかつてのボスやガキ大将といった核がない。旧来の体制は消えつつあるが、それが個の確立には向かわず、幻影のような形だけの集団が個の意識や行動を支配しているように見える。「空気を読む」こと「忖度すること」が、相変わらず高い価値を持ち続けていると言えるだろう。

個人の宗教意識も、そのような集団性の中で漂っているとみてよいだろう。つまり、独りで自分自身を見つめその存在の意味や根拠を問うということや、自分自身を懸けて決断し信じるというような、個に深く根差した信仰への意識は薄いといえる。家族が、親族が、あるいは地

域の皆がそうなので、自分もそれに準じて宗教行事に参加しているということではない。個にとっては、古臭く感じたり自分自身の本心ではないと感じたりしつつも、それらの集団の和を乱すほどに、こだわることではないとの判断なのだろう。個々の宗教意識は、まだまだその程度なのだともいえる。宗教的に違和感を持ったとしても、長いものには巻かれた方が良いと判断する程度の宗教意識なのである。

ここでも一役買うのが、「これは宗教ではなく慣習だ」という捉え方である。それが宗教行為、宗教行事であれば、自分はそれを信じてないので参加したくないと思う。その判断の元には、現代人としての信教の自由という意識があるかもしれないし、良心に従っての行動という意識があるかもしれない。しかしこれは古くから続いている単なる慣習であるというのであれば、目くじらを立てて不参加を表明することもない。

かつてその行為は宗教的な意味合いの下で行われていたが、今やその意味や背景は涸れ果て、形式だけが慣習として受け継がれている。長い時間を経る中で、そのような事例は確かに多くあるだろう。しかしその同じ「慣習」という箱の中に、まだ枯れてもいない生木の宗教行為が放り込まれるのが問題なのである。そのような宗教的曖昧さの中であって、先ず重視されるべきことは、この慣習か宗教行為かという判断主体を個の側に置くということだろう。少なくとも宗教教育においては、宗教に対しての意識を高め、感度を強くして、それぞれの個を確立することを目指す必要があるといえる。

### (3) 宗教的情操との関連

このような状況下で「宗教的情操」という言葉が用いられ、内容は曖昧なままに学校教育には必要なものと認知されることについては、やはり警戒感を抱かざるをえない。それは「日本的」と捉える枠組みを強化し、ステレオタイプ化を強めるとともに、それとは異なる感性を否定していくことに繋がるからである。さらには宗教行為との境界があいまいな行為を、慣習として教育の場に持ち込むことにより、個としての宗教意識を集団の中に流し込み、薄れさせていくことにも繋がるだろう。

民族主義的な方向性を持ち、国家神道の再興を図るというような主張については言うに及ばずだが、例えそのような意図はなくとも、「宗教的情操」にこのような懸念がある以上は、これが示す内容を一度きちんと解きほぐし、その後必要とされることを再吟味しながら組み替えていく必要があるだろう。

## 5. 残された課題

今後必要な作業は、「宗教的情操」が示す内容の解体と再構成である。その際の、手がかりとなるものを先ずは探さなければならない。ここではまだ、おぼろげにしか提示することができないが、「スピリチュアリティ」「魂」「いのち」「人権」などが、それぞれに何らかの方向性を示し、思考の手がかりとなるのではないかと考えられる。

ここまでの「日本的宗教観と宗教教育」をテーマの内にも、積み残した課題は多く残っている。時間的な制約もあり、力量不足もあるが、何といても「日本的」というテーマ自体があまりにも大きく、そこから何を取り出すべきか絞り切れずにここまで来たためだといえる。以下に、気になりながらも十分に触れることができなかった課題を記しておく。

日本論、日本人論の中で

- ・日本人の精神性——「甘えの構造」の主張
- ・河合隼雄「中空構造論」
- ・天皇制との関係

日本の宗教的土壌の問題

- ・土着的宗教性（アニミズム的信仰）
- ・カミと神の違い
- ・陰陽道、儒教の影響
- ・仏教と神道（神仏混淆の経緯）

日常化した宗教性の問題

- ・「さくらソング」の興隆
- ・武士道との関係
- ・内村鑑三「2つのJ」（愛国心の問題）

これは「何を教材にするか」という問題でもある。限られた時間の中で、受講生にはっきりと、くっきりと響く教材を準備するという課題である。そのためには、それぞれが照らし出しているものをしっかり見つめ中核をつかんで、さらにそれをほぐしておく必要がある。まだまだそこに至るまでには遠いが、周りを見渡しながら素材としては多くのものがあるのだと確認することはできた。今後、それらを活かしていく取り組みへとつなげていきたい。

## 注

- 1) 野口 真・濱野道雄「宗教教育の課題——「宗教的情操」を手がかりとして——」, 西南学院神学部論集 第74巻 第1号, 2017, p.91
- 2) 大辞林 第三版(「コトバンク」<https://kotobank.jp/>を参照)
- 3) 保科龍朗「サザエさんをさがして」, 朝日新聞(東京本社), 2016年3月26日朝刊, 3ページ
- 4) 正木 晃『「千と千尋」のスピリチュアルな世界』, 春秋社, 2009
- 5) 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃編『心理学 第4版』, 東京大学出版会, 2011, pp.248-252

- 6) ルース・ベネディクト (角田安正訳) 『菊と刀』, 光文社古典新訳文庫, 2008
- 7) イザヤ・ベンダサン (山本七平) 『日本人とユダヤ人』, 文藝春秋, 1970
- 8) 土居健郎 『甘えの構造』, 弘文堂, 1973
- 9) 内田樹 『日本辺境論』, 新潮社, 2009
- 10) 内田樹 『日本辺境論』, 新潮社, 2009, p.23
- 11) 内田樹 『日本辺境論』, 新潮社, 2009, pp.158-159
- 12) 内田樹 『日本辺境論』, 新潮社, 2009, p.159
- 13) 内田樹 『日本辺境論』, 新潮社, 2009, p.159

西南学院大学・神学部・神学科 (非常勤講師)